ぷれみあむみにっつ
premium minute

第3集

車を手に入れろ！
の巻

☆ shiroa ☆

☆　５　☆　車を手に入れろ！

「それじゃ、よけいに駄目じゃん！　だってハヤトの家から遠ざかってるぅ」
　明らかにミユウちゃんは眉を吊り上げて怒っている。どうして彼女は怒ってる顔もかわいいんだろう。
「甘いぜ、ミユウちゃん。俺は昨日車に乗って出社したんだぜ。そして上司に呑みに付き合わされた。だから飲酒運転になっちゃうから電車で帰って来たわけだ。な、俺の回想とちゃんとツジツマが合ってるだろ」
「うんうん」
　ようやくミユウちゃんは納得したらしい。ほっとした表情をしている。
「じゃ、今この電車はハヤトの会社がある駅に向かってるのね」
「その通り。コインロッカーに行く時にダイヤを確認してみたら、ちょうど会社に向かうのぼり線の電車が到着する時刻だったんだ。運が良かった。なんか到着する気配もあったし、すぐにあの場から去らないと危なそうだったから説明は後にして電車に乗り込もうって思ったんだよ」
　我ながらたまには機転が利いたものである。いつもこれくらい仕事でも機転が利けば、もっと上司も優しくしてくれるのだろうか。
「で、ハヤトの会社までどれくらい？」
「二駅目だよ。一五分くらいかな」
　ちょうどここで電車が停まった。
「あ、ちょっと待ってて」
　俺は素早く近くのキオスクに駆け寄ると、お釣りはいらないと言ってスポーツ新聞を買った。電車に戻り少し間があってから扉が閉まった。夜に呑み会がある時なんかはあらかじめ電車通勤をする。そんな俺はこの電車の扉があいている時間をしっかり把握しているのだ。キオスクで買い物するくらいは大丈夫。トイレに行くと、遅れる。すべて経験済みだった。
「何買ってんのよ」
　ミユウちゃんは俺の唐突な行動が読めず、不安げに問うた。
「ふふふ、別にエッチな記事が目的じゃないぜ。宝くじだよ」
「あっ、昨日が抽選なら今日の新聞にのってるもんね！」
　命を賭けるくらいの宝くじだ。恐らく高額当選は間違いないだろう。けれど、まだ番号を確認したわけではない。なんだかまたどきどきしてきた。
「ねぇ、もし一等が当たってたらどうする？」
「あたし、ファンドに投資して、その儲けたお金で遊びながら暮らす。ちょうど仕事も辞めたところだし、ちょうどいいかも」
　若いＯＬらしからぬ、発想だ。あ、もうＯＬじゃないか。
「俺も、今の仕事辞める。あんな上司の下でなんか働けない。もし、他の会社でも同じような上司がいて、それが日本の社会で当たり前のことなんだったら、もうサラリーマンなんてやりたくない」
　思わず本音が漏れた。その本音に、言った俺自身もびっくりした。

「やんなくていいよ。もしこれが当選番号じゃなくても、辞めちゃえばいいんだよ。ハヤトはまだまだ未来があるんだもん。もっと別の好きなことをみつけて生きていけばいいんだよ」
　俺は意を決して言った。
「じゃ、俺と一緒に暮らしてくれる？」
「それは嫌」
　間髪を入れない、見事な即答であった。
「あ、そう。また振られたね」
「あたしも自分にびっくりするくらい、振り慣れてるわ」
　そんなバカな話をしていると、またタコ焼き男が俺たちのいる車両に入って来た。一瞬緊張が走った。まさか、この男がカエル達の仲間なワケはないはずだ。そんなの、時間的にも、情報的にも無理なはず。でも、この尋常じゃない雰囲気を醸し出す男、警戒はしておいた方がいいだろう。一度俺たちの前を通り過ぎ、今度戻ってきたのだ。明らかに何かを、誰かを探している！
「しっかし、昨日の阪神はだらしないよなぁ」
　ちょっとわざとらしかったかも知れない。俺はスポーツ新聞の一面にあった阪神対中日戦の記事を見て咄嗟に言った。ミユウちゃんはきょとんとしている。
「だってさ、九回の表まで十対二で勝ってんだぜ。それが、九回の裏で逆転負けだもん。ある意味伝説の名勝負だぜ」
「へえ、なんか阪神強いのか弱いのかわかんないね、その試合だと」
　つかつかとタコヤキが近づいてきた。
「強いのよ、本当は。でもさ、心が弱い、そこが問題。最後の最後の詰めが甘いっていうか、気を抜かずに最後まで頑張れっていうかさ。バリウムを飲む時に炭酸を先に胃に入れるんだけど、げっぷを我慢しなきゃなんないのにちょっともらしちゃうみたいな。そういう詰めの甘さがあるんだよね」
　タコヤキは俺たちの前でぴたりと足を停め、ぐいと顔を俺たちに向けた。
　どきどきした。こいつが追跡者なわけがない。もし追跡者なら、どういう理屈で俺たちが宝くじを持ってることが分かる？　大丈夫、大丈夫なはずだ。
　必死に自分を落ち着かせようとする。けれど、男の一言は俺たちをどん底に突き落とした。
「ねぇ、つかぬことをうかがうが、宝くじ持ってるか」
　背筋が凍りつく感覚に襲われる。俺はミユウちゃんの手をぐっと握り締めた。温かい、彼女は、俺が守らないといけない。
「へ？　持ってねぇっすけど」
　俺はとぼけた。男は無表情でぼーっと俺を見ていたが、ゆっくりと首を傾げ「もし持ってるやつ見かけたら俺にチクれよ」と言って去っていった。……追跡者だ！
　しばらく無言だった。タコヤキは他の乗客にも宝くじのことを聞きながら、次の車両に移っていった。姿が見えなくなり、ようやくほっとした。
「って、なんで俺たちが電車に乗ってるの、ばれてんの？」
　なるべく軽口を叩くようにいったつもりだが、うまくいかなかった。声が震えた。

　ミユウちゃんがぼそっと言った。
「腕見た？　縦に赤い線が残ってたけど、もしかしたらさっき電車に乗り込む時、挟まったのってあの人かも」
　気付かなかった。そんな痕が残っていたのか。アレルギー体質の人は触れたところにみみずばれのような痕が数分残る、そんな体質の人がいるという。まだ、うっすら残っているのは、人によってはありうるのかも知れない。
「いずれにせよ、電車ももうすぐ停まる。あいつ、タコヤキにばれないように駅を出て、早く車を手に入れよう。……宝くじはここで出すわけにはいかないね」
　俺は手早く新聞を繰り、宝くじの当選番号のページを探した。途中、ちょっぴりエッチな写真があり、瞬間止まったが、ミユウちゃんに悟られるとまずいのですぐに目線を逸らした。当選番号のページを切り取り、新聞は棚の上にさっと置いた。切り取ったページはポケットに乱暴にしまい込んだ。
「番号は、車に乗ってから確認しよう。そうすれば絶対安全だから」
「うん」
　ミユウちゃんは小動物のように肯いた。

　俺とミユウちゃんは流れる景色を見ながら、じっと次の駅を待っていた。五分ほどのその時間だったが、実に長く感じられた。もしもまたタコヤキがここに戻ってきたら、と考えると不安が胸に広がる。
　次の駅を告げるアナウンスが流れた時、少しほっとした。ゆっくりと電車は減速する。
甲高い、擦れるようなブレーキの音が耳に痛い。
「すぐに降りれるように立ってよう」
　そう言ってミユウちゃんと共に立ち、扉で電車が停まるのを待っていた。駅には数えるくらいの人がこの電車の到着を待っていた。多少だが人目がある。人目があれば、奴らも思いきった暴力には踏み込めないはずだ。俺は他人がいることをこんなに心強く感じたことはなかった。
　ようやく電車が到着し、はやる気持ちを抑え、普通の乗客を装い改札を目指して歩く。と、ちらりと隣の車両の扉付近で、タコヤキが携帯電話で話しているのが見えた。
　「ええ、いねぇっすよ。どうします、降ります、乗ってます？」
　そこだけ聞こえた。なぜ奴らが俺たちが電車に乗ったのを知っているのか謎だが、ここで降りるかどうかは流石に予測もつかないようだ。タコヤキも俺たちには気付いていない様子。このままやりすごせれば……。
　一歩一歩が重い。ミユウちゃんも顔をうつむけてついてくる。改札口を抜け、駅の外に出たところで電車の扉が閉まった。ちらりと駅の構内を見ると、タコヤキの姿は無かった。どうやら乗っていったらしい。とりあえず、撒いた。
「今のタコヤキの臭いがしてた人、乗ってったみたいね」
「うん、タコヤキは流石に俺たちがこの駅で降りることまでは分からなかったんだ。なんとなく、カエルとかハチマキよりヤバそうな雰囲気だったね」
「うん、腰に差してた金属の棒、なんか武器っぽかったし」

「ああ、あれだけ先がとがってたら、十分凶器になりそう」
　カエルとハチマキはただの変人のおやじっぽかったが、タコヤキは少し違っていた。少し話が行き違うと、すぐに鉄拳が飛んできそうな雰囲気。
「会社まではだいたい五分くらい。車を手に入れるまであと少し、頑張ろうね」
　俺はミユウちゃんに話しかけた。ミユウちゃんもようやく撒けたことにほっとしたのだろう。少しかたい表情が打ち解けたようだった。
「あ～あ、変なことに巻き込まれちゃったな。なんか今月のあたしって、アンラッキーかもぉ」

　会社に向かい歩きだしたところで携帯が鳴った。着信を確認すると、非通知。恐らくパンダマンだ。
「はい、もしもし」
　音声処理された、そろそろ聞きなれた声が聞こえてきた。
『なんで俺の忠告を守らなかったんだ、バカが』
　今までと様子が違う。声に焦りがあった。俺、ということはこいつは男か？　そうか、そもそもパンダマンと云うくらいだから男だったのか。
『まぁいい。仕方がない。とにかく不味いことになった』
「え、もう撒いたから大丈夫っすよ。だってさっき追ってたタコヤキの匂いのするやばそうな奴も、やり過ごしたし」
『タコヤキ？　まぁいい。追手を撒いたと思ってるようだが大間違いだ。今お前は電車を降りて緑が丘の駅にいるだろう』
　サーっと頭のてっぺんから血の気が引いていくのが分かった。一瞬目の前がちかちかした。
「へ、なんでわかるんっすか」
　声が震えている。
『駅には行くなといったはずだ。お前はそこで狙撃されたんだよ』
「そんなバカな、俺、今、生きてるもん。血、出てないし」
『何も殺すために狙撃するわけじゃない。眠らせる為に狙撃することもあるだろう。お前はマーキングするために狙撃されたんだよ』
　駅で何かが当たった感じがあった。足と背中だっけ。決して痛いものでは無かった。けど、それでマーキングされたとでもいうのか？
『ＧＰＳでお前は追われている。どのように狙撃され、発信機がどうついているかは私にも分からない。奴のことだ、見つけるのは困難だろう。追っ手はお前を目指して向かっている。逃れる術はひとつしかない。石蔵町にある長命寺へ向かえ。幸いそう遠くないはずだ。そこにいる弁慶に会え。そいつはお前を守ってくれる』
　弁慶？　長命寺？　石蔵町は分かる。ナビを使えば辿りつけるか。
「あの、あなたは……」
　俺が何者なのかを訊ねようとしたところで、パンダマンは遮った。
『あ、帰って来た！　もう切る、今度は守れよ！』

　また一方的に切られた。
　ミユウちゃんは心配そうな顔で俺を見ていた。
「パンダマンからの電話だったよ。またまた悪い話。どうやら俺はＧＰＳで狙われてるんだって。さっき駅で痛って思ったんだけど、その時狙撃されてて、ＧＰＳの発信機を付けられたみたい」
　急いでミユウちゃんは俺の体をパンパンと叩いた。ポケットの中も調べる。上半身を調べ終わり、下半身にいこうとした時に、ミユウちゃんの動きが止まった。
「あとは自分で調べて」
　俺はスラックスをぱんぱんと叩き、ポケットにも手を突っ込んだが、はやり怪しいものは出てこなかった。
　ミユウちゃんはボソリと言った。
「その話、嘘じゃない？」
　俺とミユウちゃんは会社に向かい、歩きはじめた。パンダマンの話が本当であろうが、嘘であろうが、はやく車は手に入れたい。
「でも、今までパンダマンが言ってたこと、ホントだったぜ。カエルとハチマキがうちにくるとか、北北西に逃げろとか、駅で狙撃されるとか。何者かわかんないけど、とりあえず味方っぽいし」
「ＧＰＳの発信機って、結局車とか携帯電話とかのヤツでしょ。それなりに大きさもあるだろうし、そんなのどうやってハヤトにくっつけるの？　分かんないように……へ？」
　俺とミユウちゃんは顔を見合わせた。
「携帯電話！」
　声が揃った。なんか、だんだんミユウちゃんとの距離が近くなってる気がする。
「今、携帯電話のＧＰＳって、電源切ってても分かるって聞いたことあるわよ。なんか怪しいアプリをダウンロードするときに、悪徳業者に情報を盗まれて、それでいつでもどこにいるかわかるようになっちゃうって」
「じゃ、この携帯を持ってる限り追われるってわけか」
　狙撃でマーキングされた、それはこの携帯電話でのＧＰＳを利用した追跡に気付かれないための陽動作戦だったのか！
「考えてみたら怪しいって思ってたんだよな～。パンダマンが俺の携帯に直接電話かけてきたんだもん。なんで俺の番号知ってんだって話だもんね」
「それが分かればまた相手を撒けるね。携帯をどこかに置いておけば、そこに向かってカエルさんたちは集まるわけでしょ。その間に遠くに逃げちゃう」
「おお！　グッドアイディア！」
　と思ったが、急に気分が沈んだ。
「はぁ、けどこの携帯買ったばっかなんだよな。まだ分割の支払いがいっぱい残ってるし。どこか置いてる間に誰かに不正に使いまくられて高額請求がきたら泣けてきそう」
　そんな俺にミユウちゃんはあっけらかんとこう云い放った。
「大丈夫、二億円あればみんなチャラになるから」

物凄い説得力のある言葉だった。

会社が近づき、俺はどきっとした。時計を見る。十時十五分。今日の晴天できらりと反射する光が俺の目に飛び込んだ。駐車場と云う名の空き地の入り口に立っているのは、まぎれもなく上司だ。この距離からでも、今日はひときわ額に油がのっているのが分かった。
俺たちは気付かれないよう、通りの角に隠れ様子をうかがうことにした。
「やべ、ミユウちゃん。俺のいじわる上司が駐車場の前にいやがるよ。どうしよう、これじゃ車とりにいけないや」
「なんで今仕事中なのにあんなとこでボーっとしてるの？」
「オフィスにいると他部署の奴らに嫌味を言われるから、特にこの時間は駐車場の前で突っ立ってるんだ。俺はたいがい外回りしてる時間なんだけどネ」
「そんなことしてるから嫌味言われるんじゃない？」
「ま、そうなんだけどね。本人としてはガードマンのつもりなんだよ。会社に不審人物が近づかないようにね。けど、一番不審なのが脂の乗り切ったおじさんが、この時間からあんなところでボーっとしてることなんだけどね」
この上司を尊敬しろというのか、この俺に。
こんな上司に叱られているのか、この俺は。いつものことなのに、非日常的な視点から見てみると、なんだか泣けてきた。
「まぁとりあえず上司が立ち去らないことには車は手に入らない。さて、どうしたものか」
俺は考えた。が、うまく頭が働かなかった。
「ハヤトの携帯で電話して、会社内に入らせるとか」
「……どんな理由だよ。それに俺、超怒られるぜ」
「例えばデスクの上に大切なものを忘れたみたいだから、それを確認して下さい、とか」
「そんなの早く出社して自分で探せって言われるよ」
「引き出しに上司が好きなお菓子があるから、それをあげるっていうとか」
「無理だな」
ミユウちゃんもなかなかいい考えが浮かばないようだ。こうして考えているうちにも時は過ぎ、上司の額は日差しに焼かれている。
「ちくしょう！　一刻を争うのに！　少なくとも十一時まではあいつあの場所動かないかんな～」
「ええ！　こうしてる間にもカエルさんたち向かってるのに！」
電車で向かうなら一時間はかかる。次の電車まで四十分待ちだったからだ。しかし自転車なら四十五分ほどで着くだろう。そんなに待っていたら間違いなくアウトだ。
「とりあえず、携帯だけでもどこかに置いておくか」
「私は会社に置いておいた方がいい気がする。もし相手が会社の中に入ってるって思ったら、追跡が難しいじゃない」
「あ、そっか。ファミレスとかだと入って簡単に確認できるけど、会社に出社したと相手が勘違

いすれば、そう簡単に入ってこれないね。……ことにあんな格好してるんじゃ」
「明らかに不審人物だからね」
　上司の額がきらっきらっと輝いた。
「ＧＰＳの精度ならば、駐車場に置いてもほぼ会社にいるってわかるよね、きっと。隣の車の下にでも置いていくことにしよう。そうなると、ますますあのバカ上司をどうにかしないとな」
　俺が再び無い知恵を絞り始めると、ミユウちゃんは自慢の小さな胸を張り、自信満々でこう言った。
「いいこと考えた！　あたしが道を訪ねて向こうの通りに連れていくから、その隙にハヤトは車を取ってきて！　で、このあたりに駐車して待っててくれればすぐに戻って来るから！」
「おお！　素晴らしい作戦！　けど、ミユウちゃん、大丈夫？」
「あたしおじさんからセクハラ受けるくらい好かれやすいから大丈夫よ」
　なんだかよくわからない自信だった。
「ま、上司はただのスケベ一般人だから問題は無いか。では、よろしく」
　やると決まるとミユウちゃんは行動が早かった。
「では！　行ってきまする！」と元気よく飛び出していった。

「ねぇねぇおじさん、向こうの通りにあるコンビニ、どの辺か教えてもらえます？」
「コンビニね、ええと、ファミリーマートがあったな。そこんとこ右に曲がってすぐだよ。すぐ見えるよ」
「ファミリーマートじゃなくて、ローソンだったかな」
「ローソン……は無かった気がするけど」
「じゃ、セブンイレブンだ」
「ああ！　セブンイレブンが確かにあるな。あそこの弁当お気に入りなんだよ。今日の昼は週末に新しく出た三色弁当にしようかな」
「そうそう、あたしもそのお弁当にしようと思って」
「じゃ、いっしょに、おじさんと買いに行っちゃう？」
「いくいく！　場所おせーて下さい！」

　そんな会話だけなんとなく聞えた。作戦とはいえ、ちょっと腹が立ってきた。俺は上司がさらに尊敬できなくなってきた。
　俺はちらちらと額の光が消えるのを確認し、完全に消え去った後に駐車場へ素早く移動した。こんなところで他の同僚に見つかりでもしたら意味がない。俺は自分の車の運転席を開けると、乗り込みながら携帯電話を隣の車の下へ放り投げた。二億円あればチャラ、そう思っても心が痛む。俺は素早くエンジンをかけ、車を発進させた。

　十時三十分。ミユウちゃんが待ち合わせの場所に帰って来た。助手席に乗るなり「お待たせ！
　おじさんいい人だったよ。お弁当、デザート付きでおごってもらっちゃった」のセリフ。呑気なもんだ。

　お弁当という言葉を聞くと、急にお腹が空いてきた。
「はぁ、腹減った。考えてみたら俺、今朝から何も食べてないや」
　食べてないうえに走り回った。携帯を捨てて安心したのも手伝ってか、緊張の糸もゆるんだのだろう。
　俺の見事なお腹のアンサンブルを聞き、ミユウちゃんは苦笑いをして言った。
「このおべんと、ハヤトにあげるね」
「え、いいの！　ありがとう！　じゃ、頂きます」
　と俺が弁当をとろうとすると、ミユウちゃんはぷいと反対の方向に遠ざけた。
「ここじゃダメ。まだ会社に近いんだから、いつカエルさんたちがくるかわかんないでしょ。安全な場所につ・い・て・か・ら。隣町の公園にでもいきましょ」
　なんか拷問っぽい気もしたが、ミユウちゃんの言う通りだ。
「わかりました。隣町の山里公園にでもいきましょう」
　山里公園は芝桜で有名な公園だ。営業先の会社の人とよく話題になるが、見事な芝桜が咲き誇る見頃に行ったことはなかった。
「山里公園、レッツゴー」
　俺は車を発進させた。